



No.014

能登北部地域医療研究所



2013.11.08

のとけんだより

あなみず地域医療塾

～日本が抱える50年先の地域医療の課題を体験を通して考える～

主催：金沢医科大学能登北部地域医療研究所

塾長：中橋 毅教授（能登北部地域医療研究所所長）

協力：穴水町・公立穴水総合病院

日時：平成25年8月3日（土）～4日（日）

会場：国民保養センター キャッスル真名井（鳳珠郡穴水町）

金沢医科大学および能登北部地域医療研究所は、穴水町および公立穴水総合病院の全面的な協力を得て、「あなみず健康長寿のまちづくりプロジェクト」活動に連携協力するかたちで「あなみず地域医療塾」を開催した。金沢医科大学、金沢大学、自治医科大学、富山大学、福井大学、石川県立看護大学、公立穴水総合病院、市立輪島病院、浅ノ川総合病院、七尾看護専門学校、石川県立田鶴浜高等学校から、医師4名、看護師5名、医学生5名、看護学生9名が参加した。これにスタッフ26名が加わって4グループに分かれてワークショップを行った。

総合病院の医師や看護師が模擬患者・模擬家族となり、シナリオにそった模擬訪問診療がグループワークで行われた。夕食後、ミニレクチャー②として石川県輪島市の北方50キロにある離島の舳倉（へくら）診療所での経験について、所長を務められた櫻井孝之先生（県立中央病院放射線科医師）、松井亮太先生（公立穴水総合病院内科医師）から離島医療の現状や体験談を聞き、意見交換会、懇親会と続いた。2日目午前9時から本学看護学部・在宅看護学の前田修子教授のミニレクチャー③「在宅看護の現状と課題」、グループワークとグループ発表、まとめなどが行われ、盛会のうちに2日間の日程を終えた。



訪問診療を実体験（SP患者さんは島中院長）



訪問診療に出かける前の全体写真

■参加者の感想（福井大学医学部2学年生の感想から抜粋）

1

泊2日と限られた時間ではあったが、熱く語って親交を深めることができた。新しい出会いが多く、穴水に行って良かったと心から思った。医療塾では参加者で4～5人のチームをつくり、模擬患者を相手に模擬訪問診療を行った。僕は医学生ながら看護師の役をすることになり、医師役などの仲間とともに診療にあたった。結果として、もっと看護師の仕事を経験したい、理解したいと

思った。看護師さんと患者さんとのコミュニケーションは本当に大切で、看護師さんは医師にとっても頼りになる存在だと感じた。看護師の視点や看護師の立場で行うバイタルチェックやベッドでの体位変換などの役割は、将来一緒に働くものとして学び、知っておくべきだと改めて思った。G1「チーム名：浪漫」のみんな、本当にありがとうございました。楽しかった、また会いたいです。

■セミナーの評価

参加者はそれぞれの立場での体験から、患者の自宅での生活を重視した医療・看護および、患者のみならず家族指向の医療・看護を肌で感じ、高齢化が進む地域での在宅医療について考える機会を得たことであろう。今回の試みから、多職種からなる「協働;collaboration」が医療

現場での連携やスキルを高めるうえで非常に大切なこともわかってきたと思われる。参加者や関係者から、次回開催を望む声をいただいているので、さらに有意義な医療塾を継続していきたいと考えている。

■在宅医療のゆくえとまとめ

日本では、現在9割近くの方が病院で亡くなっている。この中には、最後まで自宅で過ごしたいと願っていても、家族に負担をかけられない、緊急時が不安などの理由で入院を選択したが人いる。今後、在宅医療・ケアが進めば自宅での療養を希望する人が増えることが予想される。また、がん末期や難病の患者さんの、多様な価値観、満足感から、自宅での療養を選択できる社会構造を築く

ことができると考えられる。団塊の世代が75歳を超える2025年に向け、介護が必要になった高齢者も、住み慣れた自宅や地域で暮らし続けられるように、「医療・介護・介護予防・生活支援・住まい」の5つのサービスを一体的に受けられる「地域包括ケアシステム」の速やかな構築が既に検討されている。地域で暮らせる仕組みづくりをすることは社会にとって急務となっている。

金沢医科大学能登北部地域医療研究所では、現在、「総合診療医」を目指す新人医師の臨床研修制度、医師不足の解消などに取り組んでいる。また同時に、今、課題となっているのが、療養型の入院病棟が少なく、手術後、急性期の病棟での入院から在宅療養になる場合が多いので、「訪問診療（在宅医療）」の強化が奥能登を支える重要な手立てとなるが、前述のとおり2025年には今の医療体制の破綻が日本全国のいたる所で現実となることが予想される。能登北部地域医療研究所では、総合診療医の育成、チームによる訪問診療（在宅医療）が、近い将来、日本に必要とされる医療であることを確信し、今後も、「あなみず地域医療塾－多職種チームによる在宅医療研修会－」を行い積極的に人材育成に取り組んでいきたい。（能登北部地域医療研究所 中橋 毅、濱中 豊記）

金沢医科大学能登北部地域医療研究所、穴水町役場・公立穴水総合病院、まるおかクリニック等が連携して穴水町健康づくりの活動をテレビ金沢「カラダ大辞典」番組企画として大きく取り上げられ、2回に渡って放送がされました。



1 話 「住民の元気！で地域医療を守る」(8月10日放送)

【番組企画内容】

深刻化する高齢化や医師不足など奥能登の医療問題を受け、金沢医科大学は、公立穴水総合病院に「能登北部医療研究所」を設置。研修医を迎え、医師の確保と地域医療の魅力を伝え総合医の育成、積極的な医療の展開に取り組んできました。穴水町の医療を守り4年が経過。止まらない過疎化高齢化の問題に今も悩み続けています。これに歯止めをかけ、町を活性化させたいと、行政と医療が手を組み、「健康長寿のまちづくり」という新たな取り組みが行われてきました。

その目玉となる企画が「あなみず健康マイレージ」。地域住民に日々健康に心がけ、病気への知識を深めてもらおうと、検診やウォーキング、講演会などイベントに参加することでポイント制度の仕組みを作り、達成者には記念品や抽選で能登空港往復チケットがもらえるなど、「町の元気」となってくれる人を表彰していこうというものです。また穴水町の地域住民の健康意識はもとより高く、発足33年の歴史を持つ健康クラブがあり、平均年齢72歳の100人ほどのメンバーが週に1回集まり、健康増進や交友関係を深めることを目的とし、ダンスを創作し練習しています。そのダンスのお披露目場所は保育園や介護施設で、慰問としての奉仕活動も行っている団体でもあります。代表を務める松田栄四郎さん(81歳)は、その他にも老人クラブや放課後児童クラブの代表を兼ねもち、地域の活性に精を出しています。「皆の元気が私の元気。これからもこの街を支えるお手伝いをしたい。」と話す松田さん。

ご年配者が健康で安心して暮らせ、元気が町の活性をさせていく。さらに進む高齢社会に備えた「健康長寿のモデル地区」を目指す、穴水町の新たな街づくりを描いています。

2 話 「奥能登の医療を支える医師、育むスタッフ」(8月24日放送)

【番組企画内容】

奥能登で貴重な小児医療を提供する「まるおかクリニック」。院長の丸岡達也医師は、開業する病院からほど近い公立穴水総合病院で子供の急患の対応にもあたるなど奥能登の小児医療に欠かせない存在となっています。

また、金沢医科大学が設置した「能登北部地域医療研究所」。所長である中橋毅教授は、公立穴水総合病院に高齢医学科を立ち上げ、高齢者の診療・治療、また病院へ赴けない患者の元へと向かう「訪問診療」を行うなど総合医として幅広く活動し、能登の医療に大きく貢献しています。

一昔前に囁かれた能登の医師不足。問題がおこることなく解消されたかのように見えるのは、こうした能登で従事する限られた医師や医療スタッフの知恵と熱意、連携と協力によって支えられている背景があるからなのです。



一人ひとりの医療スタッフが地域の要となり活躍する中、問題視されているのは、高齢化でその波は医療スタッフにも及んでいます。今能登の医療に望まれ、必要とされているのは、「若い力」です。そこで公立穴水総合病院が主催し、能登北部医療研究所が進行を務める「あなみず地域医療塾」を開催。全国から医師や医療スタッフを集め、能登の地域医療、総合医のやりがいと魅力について伝えます。また2050年の日本の高齢医療環境に直面する穴水町の今、それに触れた受講者はどのように感じたか。

番組では、未来の医療スタッフが能登の医療に興味を持つ様子や、発展・活動を続ける「熱い能登の医療の今」の皆様のご活躍について紹介しています（テレビ金沢「カラダ大辞典」）。



〇問い合わせ（濱中・橋本・濱崎）

能登北部地域医療研究所（公立穴水総合病院内）

電話 0768-52-0655 FAX0768-52-0658

E-mail ccm@kanazawa-med.ac.jp

〒927-0027 石川県鳳珠郡穴水町川島タ-8